

創刊号

01

2025年6月

アジアのみのり

対談

教科書の先へ アーカイブで広がる”学び”の可能性

デジタル化が日本の学問、
教育をどう変えていくか。

アジア研究  デジタル化

教科書に出たアレ！

デジタル化された
仏教研究が生み出す地平

コラム

アジアのことば

デジタル化資料がひらく世界
インタビューこぼれ話

渡邊 英徳

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府 教授
U-PARL 兼務教員

情報デザインとデジタルアーカイブを研究。首都大学東京システムデザイン学部 准教授、ハーバード大学エドウィン・O・ライシャワー日本研究所 客員研究員、京都大学地域研究統合情報センター 客員准教授などを歴任。

おすすめ書籍 庭田杏珠・渡邊英徳「AIとカラー化した写真でよみがえる戦前・戦争」光文社、2020年

大井 将生

同志社大学 文化情報学部 准教授

「デジタルアーカイブの教育活用」を主なテーマとして情報学やデジタルヒューマニティーズの視点から学校教育を対象とした実践的研究に従事。高等学校教諭、東京大学大学院情報学環特任研究員、人間文化研究機構 / 国立歴史民俗博物館 特任准教授 等を経て、現職。

おすすめ書籍 M. マクルーハン (楽原裕・河本仲聖訳)「メディア論 人間の拡張の諸相」みすず書房、1987年
イヴァン・イリッチ(東澤・小澤周三訳)「脱学校の社会」東京創元社、1977年

Q

”アーカイブで広がる
学び“の可能性

教科書の先へ

デジタルアーカイブの今

U-PARL 太田 『アジアのみのり』はこれから大学や研究の世界を目指す若い方々に、アジア研究のおもしろさを実感してもらえるような雑誌を目指しています。創刊号の巻頭特集では、デジタルアーカイブの最前線で活躍する渡邊英徳先生と、渡邊先生のお弟子さんでアーカイブの教育活用を研究する大井将生先生にお話を伺い、デジタルアーカイブの未来像に迫ります。まずはお二人の研究者としてのキャリアについて聞かせていただけますでしょうか。

渡邊 僕はもともと建築家になりたかったんです。建築学科の学生だった時に3Dで製図ができるCADが使えるようになって、現実世界では建築を簡単に建てるのができませんが、バーチャルの世界だっ

たらいくらでもできてとても楽しかった。それからSONYに入社し、ゲーム空間の建築や都市をデザインしていました。でもある日ふと、自分はゲームがやりたいんじゃないかと気が付いたんです。そして2005年にGoogle Earthが無料になると、パソコンの向こうに「格好の敷地」が現れます。デジタル上だったらいくらでもいろんなデータを載せたりできるわけです。そんな中で出会ったのが、ツバルで活動している写真家さんだったり、何か新しい戦争体験の継承方法はないかと考えている長崎の若者だったり¹…、つまり建築家でいうとお施主さん。世の中には貴重な記憶を未来に残したい人がたくさんいらっしゃる。そういう人たちとコラボレーションして、デジタルのミュージアムをつくるのが自分の研究テーマだという考えにたどりつきました。33歳ぐらいですかね。

太田 大学を出て研究室に入りそのまま研究者になられた方と比べて、直線距離

ではなかった部分が渡邊先生のご研究を豊かにしているような気がいたします。大井先生、いかがですか。

大井 私も普通のアカデミックキャリアとは異なります。もともと高校の教員をやっていて、生徒たちがいろんな考え方とかにアクセスできる状況、環境をつくりたいという思いがあったのですが、やはり現場だけだと解決できないこともあり、アカデミックな道に入ろうと思いました。研究テーマは探究学習における問いと多様な資料の接続、構造化なのですが、大げさに言うと「どこでもドア」と「タイムマシン」みたいな学習環境を届けられたら素敵だなと思っています。

「どこでもドア」と
「タイムマシン」みたいな
学習環境を届けたい

デジタルアーカイブにはその可能性があると考えています。例えば、こんな高校生がいました。2025年に東京でデフリンピックが開催されるけれど、メディアで報道もされないし、多くの人がそのことを知らないのはなぜだろうという問いを立てて、当初は先行研究をレビューしていたのですが、先生からの助言を受けて、当事者にインタビューを行い、その実践結果をアーカイブ化しました。この子が行動を起こさなければ未来に残らなかったかもしれない情報、それをアーカイブして過去と現在と未来をつなげていく、その担い手は専門家とは限りません。

渡邊 そうですね。2024年能登半島地震が起きたときにフォトグラメトリ、被災地の立体形状を誰にでもわかりやすく把握できるようにマップを作成して公開したのですが、それを地元で救援活動をしている方が被災地のどこが通行止めになっているとか、どこが孤立集落になっているかという情報発信に使っていただきました。その際に実感しましたが、結局は有用であろうと思って公開するだけでも実はいいんだなと。そこから先はユーザーが使い道を見出して、どんどんクリエイトしてくれる。



太田 やはりこれからのアーカイブというのは専門家が完成形をつくって公開しておしまいではなく、つくるためのメソッドを教わった人たちが自ら展開していく、そしてアーカイブ自体がその次なるものの創発の起点になっていくような未来がはじまりつつあるんだなと感じました。「みんなでつくる」というのがこれからのキーワードになってくるかと。

渡邊 そうそう、一人ですることってたかが知れてる

ので、得意な人に教わったり、あるいは委ねちゃう。

デジタルアーカイブがひらく未来

大井 私はS×UKILAM² 連携という、小中高の学校関係者や大学・研究機関、地域施設、企業、図書館、文書館、博物館や美術館といった方々と一緒に、いろんな文化資源を使った教材化を行っています。教材作成のための手順とか、必要なマテリアルと枠組みの部分を提供したら、私の手を離れて、自分たちでコミュニティをつくって共創的に広がっていくことがあります。その媒介にデジタルアーカイブがあると楽しくうまくいくように思いました。

渡邊 気軽に集まってみんなで一緒に文化に触れたり、何かものづくりをするような場所としてのデジタルアーカイブ。僕らが子どもの頃だと、公民館や図書館のような存在になれるといいですよね。そこで渡邊研で注目しているのは、ノーコードのツールだったり参加型のワークショップを開催すること。ただ、自由参加のワークショップとなると、もともと関心が高かったり、裕福な家庭の子だったりと参加者の属性が限定的になる。もっと裾野を広げたい。どんな子でも楽しく入っていけるように、無料塾や子ども食堂にデジタルアーカイブにアクセスできる環境をつくとかね。そのためにプラットフォームやインターフェイスが工夫できるといいですよ。

大井 自分たちのつくったものに価値があるって思ってもらえるような、誰でも書き込めるようにその場が設計されると、よりモチベーションも上がるかもしれないですね。

太田 お二人を見ていると、研究者というよりプロジェクトを生み出して未来をデザインしていくプロデューサーのようです。これからの研究者にはそういう側面が求められるのかもしれませんが。

大井 お金がないとか、不安定だとか大変なこともいろいろありましたが、でも

同じように教育を変えたいと思っている先生と出会えたり、こんなに魅力的な資料なのに使ってもらえないと言って悩んでいる図書館、博物館の人や研究者の人たちと出会ったりして、いろんな人に支えられて、一緒につくっていくよこびみたいなのを実感して、研究の道に進んでよかったなって改めて今は思っています。

渡邊 何かに夢中になっていて、他の人には絶対に譲れないものがある人はぜひ研究の世界に飛び込んできてくれるといいなというふうに思いますね。必ずそれは研究になる！

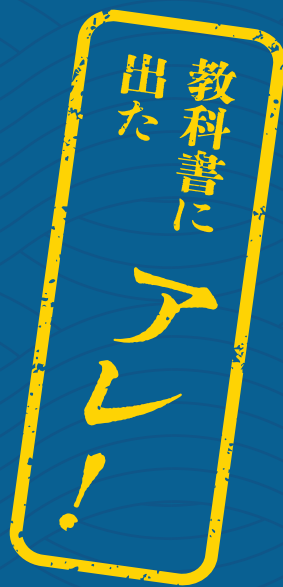
太田 本日は貴重なお話をありがとうございました。

聞き手＝U-PARL 特任助教 太田絵里奈

¹ 現在もそれぞれ「ツバル・ビジュアライゼーション・プロジェクト」「ナガサキ・アーカイブ」として公開されています。

² S×UKILAM (スキラム) とは、小中高の教員や教育委員会などの学校関係者(S)、大学・研究機関(U)、公民館など地域の施設(K)、企業(I)、図書館(L)、文書館(A)、博物館・美術館(M)などの関係者が、属性を越えて多様な文化資源を子どもたちの学びに資するために協働するコミュニティ及びその一連の取り組みのこと。

デジタルアーカイブが
公民館や図書館のような存在
になれるといいですよね。



デジタル化された仏教研究が 生み出す地平



一色 大悟

U-PARL特任准教授・副部門長

博士(文学、東京大学)、専門は仏教学。法曹界を目指して大学に入るものの、出る頃には仏法を研究していた。その後、人文系のデジタルデータベース構築に関わったり、分野横断研究を支援したり、学生運動のインタビュー調査をしたり、京都で学問の本質をたずねてまわったり、といった紆余曲折を経て現職に至る。

座右の銘

「世の中をなんのヘチマと思えども、ぶらりとしては暮らされもせず」
(栗柯亭木端の狂歌)。



Seated Buddha
(メトロポリタン美術館No.2003.593.1)
ガンダーラの仏像

仏教はメディアか、コンテンツか？

仏教はメディアだ、という考えは、いくつかの意味での射ているように思われます。

とはいえ、古代インドでガウタマ・シッダールタ(=仏)が発した教えが(『世界史』p.54)、時代と場所を超えて伝わったものが仏教だと考えると、それはメディアではなくコンテンツのように思えるかもしれません。しかし実際のところ歴史を通じて仏教者は、あらゆる時代と場所に最適化されるよう、それぞれの体得した仏教を語り直してきました。その営みによって、仏教は極度に多様化し続けています。この様態を素直に捉えるなら、仏教は時空を超えて伝わるコンテンツというよりも、むしろ個々の仏教者が自らの考えを表現するメディアだと言ってもよいでしょう。

一方で、仏教にはメディアという観念がもともと組み込まれている、という意味でも、仏教はメディアです。ガウタマ仏の時代から現在まで仏教は、教える者と教えられる者の間で伝えられることによって

存続してきました。伝統的に、仏教の構成要素が仏(教える者)・法(教えられる内容)・僧(教えられる者)の三者へと区分されていることは、教えの伝達こそが仏教という宗教現象の基本構造だということを意味しています。

仏教のメディア展開

この仏法僧という構造が示すように、仏教はもともと人をメディアとして伝えられるものでしたし、今もそれは変わりません。ただ、その歴史を一貫して、仏教者は新しいメディアを積極的に取り入れてきました。アレキサンドロス大王のインド遠征によって古代ギリシアの文化がインドに伝播した結果、紀元前後のガンダーラ(現在のパキスタン、アフガニスタン)で仏像が作られるようになったこと

も(『世界史』p.56)、仏教を生身の人間以外のメディアで伝えようとしたメディア展開の一例です。これと同時期に教えを文字で書き残すことが始まり、さらに東アジアでは印刷メディアもいち早く仏教に取り入れられました。仏教文献である『百万塔陀羅尼』(『日本史』p.54)が現存最古の印刷物であることも、それを表しています。仏教の印刷事業は、仏典の全書である大蔵経(『世界史』p.138)の出版が、たびたび国家事業として行われただけではなく、日本においては商業出版にも展開しました。近代日本では『中央公論』(『日本史』p.297)のような雑誌も、仏教運動が母体となって創刊されています。この他にもたとえば、漫談や音楽といった音声メディアも用いられていました。僧侶が民衆に教えを説くとき笑いを取って座を温めるべきだという主張は、はやくも紀元後5世紀頃にインドで見られますが、日本では僧侶が笑いを取る説法が落語の成立に関わりました。また、ラジオやレコードが日本で普及する頃には、日本で最初の交響楽団を組織した山田耕作(『日本史』p.299)を中心として、仏教音

万亭応賀ほか「悉達太子倭双六(したたたいしやまとすごろく)」(東京都立中央図書館蔵)。ガウタマ・シッダールタ(=悉達太子)の生涯を描いた通俗文学「釈迦八相倭文庫(しゃかはっそうやまとぶんこ)」の付録。



『八千頌般若経(はっせんじゅはんにゃきょう)』(サンスクリット写本No.44、東京大学総合図書館蔵)

楽というムーブメントも起こりました。

仏教が新メディアを取り入れ続けてきたことを念頭に置くなら、20世紀末以来のデジタルメディアを用いて学術アーカイブを構築する潮流の中で、仏教学が一つの先駆けとなったことも、決して不自然とは思われないでしょう。1980年代末から世界中で仏典のデジタル化が開始され、現在では漢語ではC-BETA、チベット語ではBDRC(旧TBRC)といった大規模デジタル資料群が構築・運用されるに至っています。近年では、カリフォルニア大学バークレー校において、生成AIを用いた古典語・現代語の仏教文献翻訳ツールであるDharmamitra Translator (<https://dharmamitra.org/>)が公開されたように、新技術を用いて仏教知へのアクセスを容易にする取り組みも続いています。AIによって文字をテキストデータに変換するOCR技術も、古典語で書かれた仏典を対象に、世界の各地で開発が続いています。

デジタル化された仏教学の将来

こののち、デジタル化された仏教研究が生み出す知の地平は、これまでに作られた

学問分野の「地図」と大きく異なるものとなるでしょう。少なくとも、特定の言語や文字についての習熟や、資料所蔵先へのアクセスなどによって作られてきた知識の壁は、近く乗り越えられ、それを前提としていた学説に見直しが迫られるようになることは、疑いありません。小さな一例を挙げるなら、そもそも「仏教」という語が広く使用されるようになるのは明治半ばごろであり、それ以前は「仏法」「仏道」などの表現のほうが一般的でした。では「仏教」という表現がどのように広まったのか。この問いにアクセスすることはかつて膨大な労力を必要としていましたが、現在では近代以降の出版物が収められた国会図書館蔵書にOCRでデジタル・テキスト化し、そのデータを分析するという道が生まれています。

最後に、ここで紹介した仏教メディア史において、日本の東京大学が実はすべてをつなぐハブとなってきたことも、知っておいてよいかもしれません。東大サンスクリット学講座の初代教授であった高楠順次郎は、近代仏教学の成果にもとづく『大正新脩大蔵経』を編纂しました(実は、高楠は『中央公論』の創刊者の一人であ

り、仏教音楽の推進者でもあります)。この大蔵経は、世界で標準的に用いられる漢文大蔵経となっただけでなく、1994年に設立されたSAT大蔵経テキストデータベース研究会によってデジタル化され、その後の機能拡張を経て、現在は仏教学にとどまらないアジア研究における学術基盤の一つとなっています。

日本にいる我々がその一部であるところのアジアを、これまで誰も知らなかった連関性の中で知る道は、デジタル化によって今生まれつつあります。

『世界史』：木村靖二ほか『詳説世界史』山川出版社、2024年
『日本史』：佐藤信ほか『詳説日本史』山川出版社、2024年

SAT大正新修大蔵経テキストデータベース



もっと深く知りたいあなたへ

碧海寿広
『高楠順次郎』吉川弘文館、2024年

下田正弘・永崎研宣編
『デジタル学術空間の作り方』文学通信、2019年

宮崎展昌
『大蔵経の歴史』方丈堂出版、2019年

村田みお・石井公成
『教えを信じ、教えを笑う(シリーズ実践仏教4)』
臨川書店、2020年

こんにちは！

人は人と会った時や別れる時に、必ず挨拶しますね。それは人と人の交流に欠かせないものだからです。今回は、雑誌の創刊号なので「挨拶」から始めたいです。

世界中のみんなと同じで、キルギス人にとっても「挨拶」は相手に対する気持ちや態度を表すものとして、大事な役割を果たします。挨拶の動作も様々です。相手と握手したり、肩を寄せ合って抱擁したり、お互いの頬にキスをしあったり、自分の胸に右手を当てて挨拶したりします。各々の動作にすべて意味があり、上下関係や友だち関係、更に男性同士、女性同士の関係など



U-PARL 特任研究員
アクマタリエワ ジャクシルク

様々なシチュエーションに合わせて変わってきます。キルギス語で「こんにちは」に当たるのは、Саламатсызбы? (サラマトシズブ?)「お元気ですか?」という疑問文で、返事はСаламатчылык (サラマトチュルク)「元気で」と答えるのが一般的です。ちなみに、Салам (サラム)はアラビア語由来で「平和・元気」を意味し、相手の幸せを願う言葉としてイスラーム教徒の間で広く使われています。

大河内秀元著『朝鮮物語』

『朝鮮物語』は豊臣秀吉の命により文禄・慶長の役、いわゆる朝鮮出兵に参加した大河内秀元(1576-1666)が従軍した際の日記をもとにまとめた戦記文学です。東京大学には7本の所蔵があり、2024年度には写本や抄本と称される筆写資料2本と、版本または板本と称される版本を彫って印刷されたもの2本をデジタル化しました。版本の刊行年に注目すると嘉永二年則ち1849年と秀元の死後180余年が経っていますが、これは江戸時代当時「朝鮮ブーム」が巻き起こっていたことが背景にあるともいわれています。

東京大学には『朝鮮物語』と冠するものが複数あります。①大河内秀元著『朝鮮物語』②木村理衛門著『朝鮮物語』と③林鷺峰が

記した『朝鮮物語附柳川始末方長老口上覚書』というもので、③は国書偽造を巡る柳川一件について方長老(規伯玄方)が口上した内容を林鷺峰が書き留めたものです。同じ書名であっても内容が異なりますので東京大学に所蔵される『朝鮮物語』を比較してみるのはいかがでしょうか。



出典：大河内秀元『朝鮮物語』(東京大学総合図書館蔵、請求記号 G23:240)



U-PARL 共同研究員
澁谷 秋



U-PARL 学術専門職員
菅崎 千秋

『アジアのみのり』創刊号いかがでしたか。渡邊英徳先生と大井将生先生にお話をうかがった巻頭対談は、約2時間にわたり行われ、とても充実した内容となりました。ここでは、誌面に掲載することができなかったお話を少しだけご紹介いたします。

デジタルアーカイブの分野では、これまで人がつくったマテリアルをどう保存するかという信念で研究が行われてきました。ですが、日々「生成AI」の存在感が増している昨今、これからは人が作らないマテリアルの方が多い時代へ移行していくわけです。そんな時代に私たちに何ができるのでしょうか。

渡邊先生はこんなことをおっしゃっていました。「情報空間でいくらでも資料がつけられる時代になると、人しか知的生命がいなかった時代の資料っていうのはものすごく重要性を増してくるような気がします。「人由来の資料」っていうタグをつけなきゃいけないかもしれない。え！？この本、人がつくったんですか？昔って人が文章を書いたんですか？信じられない！ってね。」

U-PARLは、東京大学附属図書館に属する研究組織です。先人たちの知の蓄積を守り伝えながら、次の時代のアーカイブをみなさまと一緒に考えていきたいと思っています。

U-PARLについて

人は、いま、ここに生きるものです。と同時に、周囲にある家族・学校・地域社会・国家・民族などといった様々な集団と結びついてはじめて、たとえば「2025年の日本で～高校や～大学に所属している学生である、誰々」というように、具体的な自分自身の位置を確信することができています。情報技術が飛躍的に進展し、個人が巨大な世界に放り込まれ、あるいは未来を予測できなくなっている今日、我々は自らの位置を深く理解して歩みだすことが、一層求められています。

東京大学は、アジアに位置するということを自覚しつつ、人類の未来のために知を創造しようとする大学であり、そのための中心地の一つとして、附属図書館にアジア研究図書館が設けられました。U-PARLは、公益財団法人上廣倫理財団の寄付によって設立された、アジア研究図書館のための研究部門として、研究と研究を、そして社会と研究をむすび、ひらかれたアジア研究を生み出すことをめざしています。

U-PARL

デジタル・アーカイビング

社会還元

文理・東西の知の融合

アジア研究図書館

詳細はこちら

イベント情報



2025. **7.24** (THU)

アジアンライブラリーカフェ 009

パンダを語ることば

総合図書館(本郷) / オンライン配信予定

中国から世界各地へと渡ったパンダたち。それぞれの土地で人々はパンダをどのように見、どのように語っているのだろうか？ U-PARLによるパンダトークイベント第2弾！



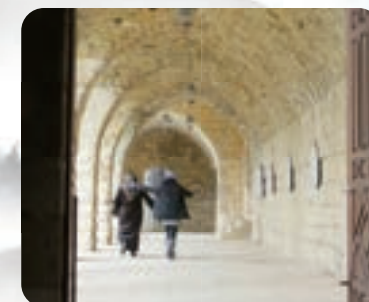
2025. **8.6** (WED)

アジア探究のお手伝い

アジアへの扉

オンライン配信(Zoom)

大学のオープンキャンパスに合わせて、U-PARL各地域担当の研究者がアジアに関わる様々な質問にお答えするレファレンス・イベントを開催します。素朴な疑問から探究学習の相談まで、一緒にアジアを深掘りしましょう！



2025. **8.6** (WED)

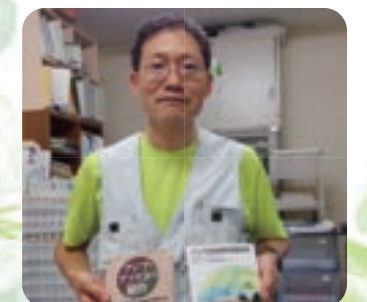
アジアンライブラリーカフェ 010

恩師が導いてくれたアジアへの道

オンライン配信(Zoom)

アジアの農の課題と魅力、そして生物資源環境学の可能性を紹介します。きっかけは大学時代の農学部との出会いでした。

講師：鴨下顕彦(農学生命科学研究科)





冊子に関する感想やコメントを
ぜひお寄せください



このページの上部をご覧ください。ロゴがふたつ並んでいます。左が東京大学、右がU-PARLのもです。

U-PARLのロゴはアジアで広く愛されているマンゴーをペイズリー紋様にしたもので、「アジアの実り」を表現しています。

「実り」は、U-PARLがアジア研究図書館を通じて日本、そして世界のアジア研究・アジア研究者をむすびつけ、大きな花をひらかせて得られる社会共通の財産です。その「実り」がまた種となり、次世代のアジア研究へとつながっていきます。

本誌『アジアのみのり』はこのU-PARLの理念をふまえて名づけられました。表紙のイラストは夏に鮮やかに実るマンゴーをイメージしつつ、アジア・アジア研究の広がりを表すべく明確な境界線をひかず、淡く拡散していくデザインを用いました。そしてこちらの写真は、収穫されたばかりのたくさんの「みのり」です。日本、世界のアジア研究の「みのり」のために力を尽くしていきたいというわたしたちの願いを込めて選びました。

